

生徒のキャリア発達を支援する キャリア教育カリキュラムの開発

— 生徒の「自己効力感」を養う支援・評価のあり方 —

松本 雅志¹

キャリア教育は学校のすべての教育活動を通じて推進される必要がある。特に生徒の学校生活の中で大きな比重を占める特別活動や教科の授業において、自己に必要な行動を為し遂げる自信である「自己効力感」を養うことが、キャリア諸能力の育成に有効であるとの観点から、授業実践を基にキャリア教育カリキュラムの開発を目指した。

はじめに

今、中学校において、自分自身の進路について主体的に選択することができない生徒が見うけられる。このような生徒達は自分の良さが見つけられず、将来にわたる希望や意欲も持てないことが多い。

平成16年1月に文部科学省より出された「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（以下、キャリア教育報告書）では、若者の就職・就業をめぐる環境の激変や若者自身の資質をめぐる問題から、フリーターやニートといった社会的に不安定な若者が増大し、社会問題となっている現状を指摘している。中学校における生徒の様子にも、この現状と共通の問題があると思われる。

ここに、これからの流動的な社会を、力強く生き抜くための意欲や資質を育てるキャリア教育が、学校教育に求められる背景がある。

そこで、その立場から、生徒が自己に必要な行動を為し遂げる自信「自己効力感」を養う教育活動のあり方について、授業実践を基に考察した。

キャリア教育について

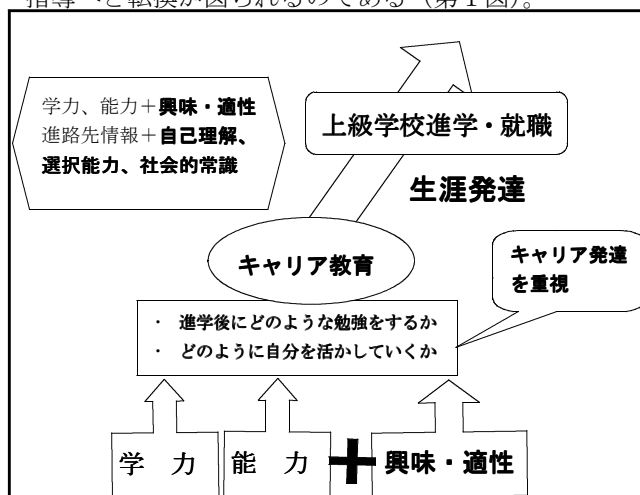
(1) 中学校におけるキャリア教育

中学校では、義務教育の最終段階として、生徒は初めての進路選択を経験することとなる。

今までの進路指導では、卒業後「どこに」進学・就職するかという「進路決定」のみに重点が置かれ、生徒の動機・適性が重要視されることは少なかった。

キャリア教育に基づく進路指導では、生涯発達の観点をふまえ「どのような」進路を「なぜ」選択するの

かといった生徒の興味・関心や能力、適性を考慮した指導へと転換が図られるのである（第1図）。



第1図 キャリア教育に基づく進路指導イメージ

平成15年度神奈川県立総合教育センター研究集録「キャリア教育カリキュラムに関する理論的研究」（以下、理論的研究）では、キャリア教育報告書をもとに、キャリア教育において高められる力について5領域10能力に分析して示した（以下、キャリア諸能力）。中学校においては、教科や各領域でのさまざまな活動を通して、キャリア発達に必要なこれらの力を培うことが求められる。

(2) キャリア教育で育てたい力～「自己効力感」

「キャリア教育報告書」では、中学校における職業的（進路）発達段階は「肯定的自己理解と自己有用感の獲得」とされている。

本研究においては、それらを基礎としながら、さらに中学校段階で必要な力として、「自己効力感」をキャリア教育で育てたい力と位置づけた。

この「自己効力感」はアメリカの心理学者バンデューラ（1977）が提唱した概念であり、「制御体験」「代理体験」「社会的説得」「生理的・感情的状態の変化」

1 二宮町立二宮中学校
研修分野（キャリア教育）

等がその源となる。

生徒達は、話し合いや体験活動を通じて「やればできる」「知識を得ることは楽しい」という成就感・満足感を味わい、「自己効力感」を得ていく。

中学校でキャリア教育を実践することは、生徒が自分自身の良さを理解すると共に、自信を持って行動する姿勢を持ち、将来にわたって生きる力を身に付けることにつながると考える。

研究のねらい

本研究におけるねらいは次の3点である。

(1) 中学校におけるキャリア教育について、学校の教育活動全体において実践する全体計画やキャリア教育カリキュラム、キャリア教育推進組織などの具体案を作成し、そのあり方を明らかにすると共に、キャリア教育充実の方策を探る。

(2) 特別活動や教科の授業において「自己効力感」を養う指導を実践することにより、「自己効力感」とキャリア諸能力との関連を探り、キャリア教育における授業のあり方を明らかにする。

(3) 生徒及び教職員にとってのキャリア教育の評価方法について、具体的な方法を提案し、適切な評価のあり方を探る。

研究の内容

1 キャリア教育カリキュラム例の作成

(1) キャリア教育の全体計画

全体計画では、学校教育目標を基に、キャリア教育で育てたい生徒像を設定し、そこから各学年の発達段階に沿って養いたい5つのキャリア諸能力について明示した。さらに、教科、道徳、特別活動、「総合的な学習の時間」の役割や内容、家庭・地域・教職員の連携について、キャリア教育の視点から位置付け全体計画を作成した。

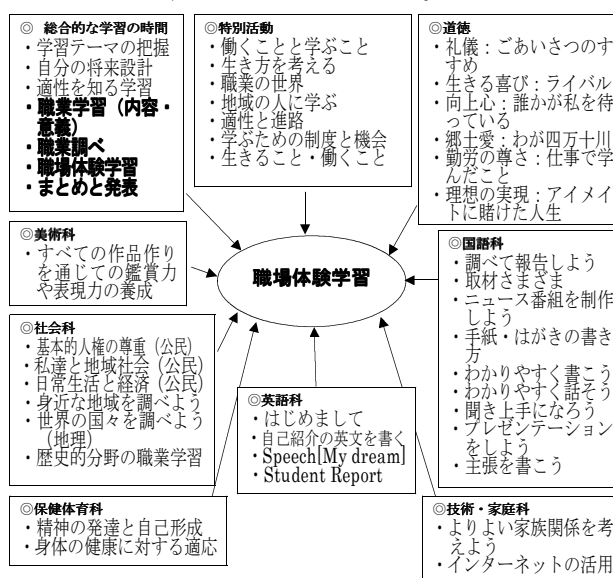
(2) 特別活動、総合的な学習の時間を軸とする職場体験学習カリキュラムモデル例

勤労観、職業観を育む体験活動として、平成14年度は全国の約87%の中学校で職場体験学習が実施されている(キャリア教育報告書)。また、教育課程の位置付けでは特別活動、「総合的な学習の時間」での実施が併せて96.5%に上る(平成15年度国立教育政策研究所調べ)。これらの数字は体験学習が中学校の教育活動の中でも重要視されていることを示している。この職場体験を、生徒にとってより有効な学習とするためには、事前・事後指導の充実をはかること、教科や特別活動、進路指導の全体計画の中に位置付け、有機的な関連を図ることが重要である。

そこで、「総合的な学習の時間」の職場体験学習を

核として、特別活動での進路学習、道徳、各教科との関連を意識したカリキュラム例を作成した。

まず、各教科・領域における職場体験学習に関連する項目を見直し、関連図として示し(第2図)、それらを時系列的に、「総合的な学習の時間」で行われる職場体験学習の指導過程の中に位置付けた。そうすることで、教科や道徳においても、勤労観、職業観の育成を意図した指導がなされるとともに、各教科間、領域間の関連付けがなされ、キャリア教育としての指導の精選や重点化を図ることができる。



養われるスキル:自己教育能力・人間関係能力・情報活用能力・将来設計能力・課題解決能力

第2図 職場体験学習をテーマとした各領域との関連図 (3) キャリア教育推進組織

キャリア教育カリキュラムが有機的に機能するためには、校内の組織作りも重要な柱となる。キャリア教育はすべての教育活動に関わることから、各指導部長・学年主任が情報の共有化を図る中で、連携を密にし協働できる体制作りをしなければならない。

その際には既存の組織を利用すること、全体計画を実効性のあるものとするために常に見直し、改善していくことが大切である。また、保護者、学校評議員をアドバイザーとして加え学校の教育活動全体を客観的に評価し、活性化を図ることも必要である。

2 自己効力感を養う授業実践

(1) 特別活動における授業実践

生徒にとって特別活動、特に学校行事における取組は「自己効力感」を養う上において重要な役割を担っている。そこで、今回はワークシートを活用し文化祭への取組を通じた実践を行った。

指導の工夫の1点目は、行事のねらいを自己の成長の確認に置いたことである。こうすることで、生徒が自分の良さを見つけ、自信を持って行動することを期待した。2点目は文化祭での役割を分析し、生徒自身

がどのような仕事に適しているのか、興味や適性を基に自己をふり返らせるようにしたことである。

このような教師の細かな指導を通して、生徒は自分の新しい個性や適性を理解することができ、また、自信を持って行事に取り組むことができ、「自己効力感」を養うことが可能となると考える。

(2) 教科を通したキャリア教育実践

中学校の教育活動の中で、生徒が学校生活の大半の時間を費やす教科の授業において、キャリア教育を行うことは大変重要なことである。

教科におけるキャリア教育では、勤労観、職業観に直接関わる題材を扱い、職業に対する知識や勤労意識を高めようとする授業と、直接、勤労観、職業観に関わる題材は扱わないものの、意欲や態度面の成長を図ることによりキャリア諸能力を高めようとする授業とが考えられる。

ア 勤労観、職業観に直接関わる題材を扱った授業における指導

勤労観、職業観に直接関わる題材を扱った授業として、社会科の歴史的分野における実践を行った。歴史の授業ではそれぞれの時代の人々の生き方について学ぶ。しかし、今まで人々の職業やそれに伴う職業観について扱うことはあまりなかった。

授業においては、大正時代に社会進出を果たした女性の姿から、職業を通じて自己実現を図ることの大切さについて理解させることをねらいとした。

授業後、生徒からは下のような感想が得られた。

Q 将来、自分はどのような気持ちで仕事に就きたいと思いますか。(抜粋)

*現在は男女差別が無くなってきたから、人の役に立てて自分で楽しんでできるような、人を幸せにできるような仕事に就けたらいいと思います。

*何ごとにもチャレンジして行って、こんなわたしでも出来ることがあると前向きに色々なことをしていきたい。最後まで自分のやったことには責任を持ちたい。

*自分で決めたことだから、他人からの目を気にしてやめてしまうなんて自分に負けることになる。自分でやると決めたからには、自分の意志をしっかり持って充実させたい。

勤労観、職業観に直接関わる題材を扱った授業では、「さまざまな状況におかれた人々の生き方に学ぶ」ことにより、働くことに対する意欲や前向きな態度が養われたと考える。

イ 勤労観、職業観に直接関わる題材を扱わない授業における指導

キャリア教育をそれぞれの教科で実践するためには、勤労観、職業観に直接関わらない題材を扱った授業において、「自己効力感」を養う指導のあり方とキ

ャリア諸能力との関係を明らかにする必要がある。

そこで、地理的分野の授業実践を通して、キャリア教育としての教科の授業のあり方を探った。

今回の授業実践においては、「ドイツと日本の環境問題」の単元を取り上げた。授業では、課題解決の過程において小集団を用い、一人が一役を受け持つことができるジグソー学習を取り入れた。

また、パソコン室を使用し自由に資料収集が行えるようにするとともに、発表の場面では全員が関わることができるように配慮した。

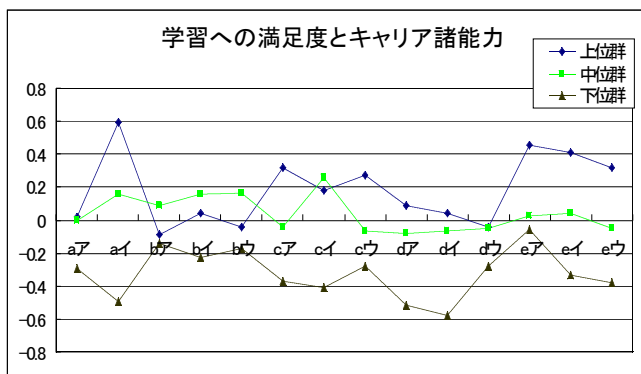
単元の始めと終わりには、生徒一人ひとりにキャリア諸能力をもとにした4点満点の自己評価を実施し、その増減について比較検討した。

生徒の「自己効力感」の違いを見るため、成就感・満足感について答えた「a ウ 自分の取組に満足することができた」という項目について、「そう思う」と答えた生徒を上位群(22名)「比較的そう思う」と答えた生徒を中位群(78名)「あまりそう思わない」及び「そう思わない」と答えた生徒を下位群(47名)に分け、学習への満足度とキャリア諸能力との関連を探った(第3、4図)。

項 目	上位群	中位群	下位群
a 自分自身のこと			
ア 興味を持って取り組むことができた	0.02	0	-0.31
イ 自分の意見や考えをしっかりと述べることができた	0.59	0.15	-0.51
ウ 自分の取組に満足することができた			
b 他の人との関わり			
ア 他の人の意見をしっかりと聞くことができた	-0.05	0.09	-0.14
イ お互いの意見を尊重しながら話し合うことができた	0.05	0.15	-0.22
ウ 自分の情報を教えたり、人から教えてもらうことができる	-0.05	0.17	-0.17
c 情報の収集やまとめ			
ア たくさんの情報を適切な方法で集めることができた	0.32	-0.04	-0.37
イ 自分なりに必要な分だけしぼり込むことができた	0.18	0.26	-0.41
ウ 必要な情報を自分なりにわかりやすくまとめることができた	0.27	-0.13	-0.28
d 役割分担や計画の進め方について			
ア 班での活動時、適切な役割につくことができた	0.09	-0.09	-0.51
イ 自分なりに班の中における役割を果たすことができた	0.05	-0.07	-0.58
ウ 計画通りに時間を使ってまとめることができた	-0.03	-0.05	-0.28
e 課題への取組について			
ア 自分の興味に基づいた課題を選択することができた	0.45	0.03	-0.06
イ 課題の意味について理解して取り組むことができた	0.41	0.04	-0.33
ウ 課題を解決するために粘り強く取り組むことができた	0.32	-0.05	-0.38

第3図 各群における学習前後の回答の変化

* 数値はそれぞれの質問に対する学習前後の平均値の差



第4図 学習への満足度とキャリア諸能力との関連

今回の授業では、7割ほどの生徒は自分の取組にほ

研究のまとめ

ば満足している。その中でも上位群の生徒は、課題の内容を理解したうえで、情報を集め、自分の興味に基づいた選択を行い、最後まで粘り強く取り組む傾向が見られた。

自分の取組に満足していない下位群の生徒は、課題の意味をあまり理解しておらず、粘り強く取り組むことが出来ていない。また、自分が適切な役割につくことが出来ず、その責任も果たせていないと感じている。

上位群と下位群との間で、もっとも差が大きいのは「a 自分自身のこと」の中の「a イ 自分の意見や考えをしっかりと述べることができた」の項目である。自分の考えや意見をしっかりと述べることは、自信を深め、満足感の獲得に関係が深いと考えられる。

反対に各群の満足感の差に比較的關係が見られない項目は「b 他人との関わり」である。これは、小集団学習を取り入れたことにより、多くの生徒が意見交換をすることができ、コミュニケーションが図られたことを示している。

これらのことから、キャリア教育における教科指導において重要なことは、次のようにまとめられる。

生徒が課題を理解し、興味を持って粘り強く取り組めるように働きかけること、一人ひとりの生徒が自分の役割を把握し、責任が果たせるような支援をすること、自分の考えや意見をはっきり述べる場を意図的に設け、コミュニケーションスキルを身に付けさせることなどが重要である。

今回の授業実践により「自己効力感」を養う指導とキャリア諸能力との関連が明らかになった。社会科に限らず、どの教科においても、指導過程を工夫することによりキャリア諸能力を高めることができ、キャリア教育としての実践が可能になると考える。

3 キャリア教育に関わる評価のあり方

キャリア教育に関わる評価には、生徒の変容を見取る評価と教職員のキャリア教育への取組に対する評価の両面の評価が考えられる。

生徒への評価は、キャリア諸能力について生徒自身が自分の成長を確認することができるような工夫のもとに行われなければならない。

教職員に対しては、キャリア教育の全体計画への評価、組織・運営上の評価、生徒の指導・支援に関わる評価、キャリア教育に関わる自身への評価などが考えられる。

教職員が、キャリア教育を通して生徒一人ひとりを見取り評価することは、幅広く多様な視点から生徒理解を図る力を育み、教職員自身の資質の向上と教育実践のあり方を変容させる可能性を持つ。

(1) 研究の成果

ア 中学校におけるキャリア教育の全体計画や職場体験学習を中心としたキャリア教育カリキュラム、キャリア教育を推進する組織の例などを作成する中で、育てたい明確な生徒像をふまえた系統的・発展的な計画、機能的な組織の構築が、キャリア教育充実の基礎であることが確認できた。

イ 自己効力感を養う授業を実践することで、キャリア諸能力を高めるための指導のあり方について方向性を見いだすことができた。

ウ キャリア教育の評価を考えることは、生徒が自分自身の成長を確認することであると共に、教師の資質を高め、教育実践のあり方を変えるという評価の重要性について確認することができた。

(2) 研究の課題

ア 各教科・各領域で、キャリア教育を実践することにより、どのような力をつけることが可能であるかを分析し、そこから指導過程、指導内容を構成・改善し、効果的な指導を具体化するように工夫する必要がある。

イ キャリア教育の計画・評価を考えた場合、生徒への指導内容や評価時期が重なり、生徒の過重負担とならないようなものとする必要がある。

おわりに

中学校において、進路選択を行い、進学や就職をする生徒たちにとって、自分の将来を自分の力で切り拓く意欲や前向きな態度を持ち続けるための「自己効力感」を養うことは大変重要なことである。

キャリア教育成功の鍵は、教職員自身が自分の教育実践を真摯に見つめ直す中で、学校全体の協力のもと、生徒のキャリア発達を支援していく実践をどのように積み重ねていくかにかかっている。

今後も生徒の生きる力を育むためのキャリア教育を実践し、推進するために努力を続けていきたい。

参考文献

- 梶輝行 2004 「キャリア教育カリキュラムに関する理論的研究ーキャリア諸能力の育成を目指すカリキュラムの構造分析を中心にー」(神奈川県立総合教育センター『研究集録第23集』)
- 文部科学省 2004 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議 報告書〜児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために〜」
- 波多野諄余夫ら 1981 「無気力の心理学」中公新書
- バンデューラ, A. 1977 『激動社会の中の自己効力』(本明寛・野口京子監訳) 金子書房